

主 題：もしキリストの復活がなかったなら

聖書箇所：コリント人への手紙第一 15章12-20節

テーマ：イエス・キリストの復活がなかったなら、私たちにどんな影響をもたらすのか？

愛する主イエス・キリストが私たちの罪のために十字架にかかって死なれ、葬られ、約束されていたとおり3日目に死に勝利してよみがえられたことをお祝いする、このイースター。今朝、改めて考えたいのは、コリント人への手紙第一15章のみことばです。今回は特に12-20節の内容を一緒に見ていきたいと思います。まずいつものように、みことばをお読みします。

Iコリント15：12-20

「:12 ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。:13 もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。:14 そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。:15 それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言って神に逆らう証言をしたからです。:16 もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかったでしょう。:17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。:18 そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。:19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」

さて、これから具体的な内容に入って行く前に、一度それぞれ自分自身に問いかけてみてください。もしイエス・キリストの復活が本当のものでなかったとしたら、果たして今の私たちにはどんな重大な影響をもたらすのでしょうか？

昨年のことになりますが、アメリカの信頼できるクリスチャンの団体の一つであるリゴニアが、約3,000人を対象にしたある調査を行ないました。その調査とは、人々が聖書に記されている基本的な教えをどこまで信じているのかを調べるものでした。回答者は「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「わからない」、「余りそう思わない」、「全くそう思わない」の5段階で回答することができ、幾つかの質問がなされました。そしてそのうちの一つがキリストの復活に関するものでした。イエスの肉体的な復活に関する聖書の記述は完全に正確で、この出来事は実際に起こったと、実際に信じているかどうか問われたのです。すると結果は驚くべきものでした。「わからない」と答えた人が11%、「余りそう思わない」と答えた人が8%、そして「全くそう思わない」と答えた人が15%もいました。つまり3,000人のうち1,024人、約3人にひとりがイエス・キリストの復活を実際の出来事として信じていなかったのです。

また、皆さん自身もだれかと聖書やイエス様の話をする中で、こんなことばを耳にしたことがあるかもしれません。神様が私たちを愛してくださって、ひとり子であるイエス様が私たちの罪の代わりに十字架にかかってくださったのですか、それはすばらしいことです。でもこの方は死なただけではなく、3日目に死からよみがえられたのだとしたら、その部分は信じることはできません、そんなことあり得ませんと。もちろん主を愛している皆さんは、キリストが確かに十字架にかかって死んで終わりではなく、死から実際によみがえられたお方であると心から信じておられるでしょう。今も変わらずに生きておられる勝利者なのだと確信しているからこそ、こうしてきょうもともに集って喜びにあふれて、礼拝をささげておられるはずですが、でももしそんなあなたのもとに、ある人がやって来て、イエスの復活は信じられません、十字架の死を信じるだけで十分ではないのですか？復活の何がそんなに重要なのですか？

か？もしイエス・キリストの復活がなかったとしたら、どうになってしまうのですかと尋ねられたら、皆さんはそれにどう答えるでしょう？キリストの復活が、私たちの歩みにとって決して欠かすことのできないものであると、どうしてあなたはそう言うのでしょうか？

感謝なことにきょう私たちが見ていくみことばは、まさにその問いに対する答えを示してくれていました。コリント人への手紙を記したパウロは、コリントの教会の人々に対して、復活がなぜたいせつなものであるかを改めて教えようとしていたのです。それは、こんな問いかげのことばで始まっていました。12、13節に「ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。：13 もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。」と書いてありました。このことばを読んだときに、皆さんもすぐに気づかれたことだと思います。間違いなくコリントの教会の中には、死者の復活に関して誤った考えを持っている人たちが入り込んでいたのです。教会には、死後、実際に自分たちがよみがえることはない信じている者たちが、またキリストの復活でさえ疑う者たちがいたということです。どうしてそんな考えが教会の中にあっただろうと思うかもしれません。そう思われたのであれば、コリントの教会を取り巻いていた背景を少し思い返してみてください。

●背景：“復活”を信じていなかったコリントの教会

そもそもコリントという町は、古代ギリシャの都市の一つでした。そのギリシャでは、さまざまな哲学が誕生して、数多くの偶像礼拝が行われていました。そして、かつてコリントに行く直前に、同じギリシャの都市の一つアテネにパウロが行ったときの様子が、使徒17章に描かれていました。町に到着したパウロは、そこでいろいろな人々と熱心に論じ合っていました。そこに、哲学者たちもやって来て、このおしゃべりは何を言うつもりなのかと彼の話に耳を傾けていたのです。そしてその中で、パウロは大胆にみことばを語り、死者の復活に関しても教えたのです。それを聞いた人々の反応が17：32に「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。」と記されていました。そこにいた人々は、死者の復活は受け入れられませんでした。ギリシャの哲学者たちにとって、死者の復活は到底信じられるものではありませんでした。ですから、そのような人たちの教えが、ギリシャ人の多くいたコリントの教会の中に、ある影響として入り込んでいたとしても、何らおかしくはなかったのです。

同時に、このコリントの教会には、ユダヤ人たちも一定数存在していました。そして、ユダヤ人の中にも復活を否定する教えをしている人たちは存在していたのです。例えばサドカイ派と呼ばれる人たちはまさにそうでした。彼らの考え方も聖書のいろいろな場所で見取することができます。これも同じ使徒の中にこんなふうに記されていました。使徒23：6－8に「：6 しかし、パウロは、彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見て取って、議会の中でこう叫んだ。「兄弟たち。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」：7 彼がこう言うと、パリサイ人とサドカイ人との間に意見の衝突が起こり、議会は二つに割れた。：8 サドカイ人は、復活はなく、御使いも霊もないと言い、パリサイ人は、どちらもあると言っていたからである。」と書いています。復活はない、そんな教えはギリシャ人だけでなく、ユダヤ人の間にも存在していました。そして、その教えが教会の中に入り込んでいたとしても、何らおかしくはなかったということです。こうしていろいろな間違った教えと影響が、周りに存在していたコリントの教会の中には、復活に関して間違った教えが広まり、混乱が生じていたのです。だからこそ、パウロはその問題について、この15章で触れていました。いったいどうしてあなた方の中に死者の復活はないと言う人がいるのですかとパウロは問いかけて、兄弟姉妹にとって最も重要な真理を思い出させようとしていました。死者の復活はないと否定する者たちに対して、もし復活がいったいないというのであれば、それはキリストも復活されなかったということになって、もしキリストが復活されなかったのだとすれば、それは深刻な問題をもたらすことになるかと訴えていました。

○もしキリストの復活がなかったら：もたらされる五つの問題

では具体的にどんな深刻な問題が生じるのでしょうか？キリストの復活が実際のものでないとしたら、どんなに大きな影響が私たちにもたらされるのでしょうか。特に五つの問題が14－19節に記されていました。いったいなぜパウロはキリストの復活が欠かせないものだと考えていたのか、そのことを私た

ちは、この中に見て取ることができます。順番にその問題を見ていきましょう。そして自分自身のこととして、ともに考えてみましょう。

1. 私たちの福音宣教と信仰が実質のないものになる 14節

さて、まず一つ目にもたらされる問題が14節に記されていました。もう一度14節を見ると、「そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。」と書いてあります。キリストの復活がなかったら生じる一つ目の問題は、私たちの福音宣教と信仰が実質のないものになるということです。ここで二度にわたって用いられていた「実質のない」ということばには、もともと「空っぽ」とか、「中身のない」とか、「空っぽで中身がないから意味がない」、「むだ」という意味が含まれています。ある店でたくさんのお宝が中に詰まっていますよと言われて購入した豪華に飾られていた袋を買って帰って開けたのに、そこには何も入っていないければ、当然買ったことを愚かに思うでしょう。中身が空っぽなら、外側がどんなに豪華なものであろうとも、全く価値のない、意味のないものだと思うでしょう。パウロが言わんとしていたことはそれと同じでした。もしキリストが復活されなかったのなら、自分たちがこれまでに語ってきた宣教のメッセージも、すべて内容のない、空っぽで意味を持たないものになってしまうと。

パウロは人々の間で熱心に福音を語り続けていました。コリントの兄弟姉妹たちに対しても、このように語っていたのです。同じ15:2-4で「:2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。:3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、:4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと」と言っていました。かつてキリストを迫害する者だったパウロは、キリストによって救われ、福音を語る者へと変えられました。十字架で救いのみわざを成し遂げてくださったイエス様にあって罪の赦しがあること、3日目によみがえられたイエス様にあって新しいのちがあるということ、そんな良い知らせを彼は大胆に宣べ伝え続けていたのです。たとえどんな迫害や苦難があろうとも、福音こそユダヤ人も、ギリシャ人も、信じるすべての人にとって救いを得させる神の力なのだと思っていました。でも、もしキリストの復活が本当でなかったのであれば、これまで彼が真実だと語ってきたすべてのことばはその土台を失い、福音は何の意味も持たなくなってしまうと言うのです。パウロだけではありません。これまでにキリストの福音を語ってきた者たちも、私が語るこの福音も、それらすべては中身がないものになってしまうと。

でも同時に、語るメッセージが中身のない、実質のないものになってしまうだけではありませんでした。そのことばを信じるその信仰ですら、中身のない空っぽなものになってしまうと言うのです。いったいなぜかという、それはキリストの復活が福音に欠かせない要素だからでした。パウロはローマ書の中で、このように述べています。10:9に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」とありました。私たちの救いにとってたいせつなのは、キリストの十字架の死だけではありませんでした。みことばは同じようにキリストの復活もなくてはならないのだと教えていました。どちらも切り離すことなど絶対にできない、私たちにとって信じなければいけない揺るがぬ真理でした。でも、もしキリストの復活が本当でないのであれば、その信仰の土台となる部分も跡形もなく崩れ去ってしまうのです。イエス様のうちに罪の赦しを見出すことができるというその約束も、罪に対して勝利するための力も、信じているもののすべてが中身のないものになってしまう。もしイエス・キリストの復活がなければ、福音宣教も、信仰もすべて実質のないものになってしまう。それが一つ目の深刻な問題でした。

2. 私たちの証言が偽りのものになる 15節

二つ目にもたらされる問題は、続く15節に記されていました。15節に「それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言って神に逆らう証言をしたからです。」と書いています。キリストの復活がなかったら生じる二つ目の問題は、私たちの証言が偽りのものになるということです。もしあなたたちが言っているように、かりに死者の復活がなくて、キリストがよみがえられたのでないのであれば、私たちが語ったすべてのことばや教えが実質のないも

のになるだけではなくて、すべてが偽りで誤った証言になるとパウロは言うのです。要するにみんなうそつきだということです。神様がキリストをよみがえらせていないにもかかわらず、キリストはよみがえられたのだと人々の前で語っているのであれば、その者は偽りの証人、神様に逆らう証言をしていることになるのです。これは非常に深刻なことでした。神様が実際にしていないことをあたかも行ったかのように勝手に語って、神様に逆らった、誤った証言を立てているのです。みことばはそういった偽りの証人という存在を、神様が忌み嫌っておられることを何回も教えていました。

例えば箴言の中を見れば、そのことを見て取ることができます。そこには主の憎まれるもののリストの一つとして、このことを挙げていました。箴言6：16、19に「:16 【主】の憎むものが六つある。いや、主ご自身の忌みきらうものが七つある。」、そしてその一つに「:19 まやかしを吹聴する偽りの証人」とあります。またそれに加えて同じ箴言19：5、9でもこう繰り返されていました。「:5 偽りの証人は罰を免れない。まやかしを吹聴する者も、のがれられない。……:9 偽りの証人は罰を免れない。まやかしを吹聴する者は滅びる。」と。つまりもしキリストが復活していないのであれば、キリストはよみがえられたと教える者たちはみんな主が忌み嫌われるうそつきで、罰をのがれることのできない、滅ぼされるべき存在だと言うのです。パウロはよみがえられたキリストについて語り続けていました。ペテロやほかの人たちもそのことを語り続けていました。彼らを含め、よみがえられたイエスを目の当たりにした500人以上の兄弟たちもその事実を語り続けていたことでしょう。今の私たちもイエス・キリストはよみがえられたと語っているのです。でも、もし復活がないのであれば、すべての者たちは主に忌み嫌われるうそつきだということです。

また、この人物たち以上に大きな問題がありました。15：4に「また、葬られたこと、また、聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと」と書いてありました。キリストの復活に関して証言していたのは、何も弟子たちだけではありませんでした。3日目によみがえることは、ほかの何物でもない聖書自体が語っていたことでもあったのです。旧約聖書はいろいろな箇所、救い主がよみがえることを予言していました。つまり復活が実際のものでないのだとすれば、弟子たちだけではなく、聖書ですら偽りだということになります。みことばは間違った証言をするような、信頼できないものになってしまうということです。もしイエス・キリストの復活がなければ、すべての証言が偽りのものになってしまう。それが二つ目の深刻な問題でした。

3. 私たちの罪はまだ赦されていない 16-17節

三つ目にもたらされる問題が続けて16-17節に書かれていました。「:16 もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかったでしょう。:17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今なお、自分の罪の中にいるのです。」と。キリストの復活がなかったら生じる三つ目の問題は、私たちの罪はまだ赦されていないということです。たいせつなことなのでよく考えてみてください。イエス・キリストがよみがえっていなければ、私たちは今なお変わらずに自分の罪の中にいるのだとパウロは言っていました。言い換えれば、キリストの十字架の死だけでは私たちの罪に関して、まだ赦しが成し遂げられていないということです。どうしてだと思いますか？ある人は思うかもしれませんが。聖書を見れば、私たちはキリストの血によって義と認められたとされているのではないですか、どうしてそれだけでは不十分なように言うのですかと。もちろん、その答えは別のみことばが教えてくれていました。パウロはローマ書の中で、はっきりとこう述べていました。ローマ4：25をよく見ていただくと、「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」とあります。パウロはここで罪のためのキリストの死と、義のためのキリストの復活を密接に結びつけていました。

でもいったい何を言わんとしたのでしょうか？ポイントはこうでした。キリストの復活は、十字架上でキリストの死が罪を贖うのに十分なものであったと、神様が認められたことの証明だったということです。私たちの罪のために十字架でささげられたキリストの尊い犠牲は完全なものでした。流されたその血潮はどこにも欠陥や不十分なところはありませんでした。だからこそ、この方にほかに罪の赦しのために何かをささげる必要は決してなかったのです。ささげられたなだめの供え物が確かに完全な神様

を満足させるものであったからこそ、罪の代価をすべて支払うものであったからこそ、神様はそのあかしとしてイエス様をその死からよみがえらされたということです。だから私たちがキリストの復活を覚える時に、これは私たちがただキリストにあって、確かに義と認められるのだということの証明になるのです。だからこそ、キリストの復活を覚える時に、私たちは確かにキリストただこの方にあって、ただ恵みのゆえに完全な罪の赦しを手にすることができると確信することができるのです。これが、私たちが持つことのできる希望でした。ほかのものではなくて、ただイエス・キリストにあって罪の赦しを持つことができるのだと。

でも、もしキリストが復活していないのであれば、墓の中にとどまったままなのであれば、本当の罪の赦しはないということでした。キリストの死が神様を満足させるには不十分だった、罪の贖いを成し遂げることはできなかった。私たちは今もなお変わらずに、自分の罪の中にいるということになるのです。そしてそんな私たちには希望などいっさいありません。唯一イエス・キリストだけが完全なささげ物をささげられるお方なのに、この方が失敗したのだとすれば、私たちにはもう何もありません。もし罪の赦しがなければ、みことばが教えていることは、例外なくすべてのものに、ただ義なる神様からのさばきが待っているということでした。罪を決してそのままよしとはされない神様の御怒りをただ受けて、永遠に地獄で苦しみ続けるしかなかったのです。もしイエス・キリストの復活がなければ、罪の中にとどまり続けることになってしまう。それが三つ目の深刻な問題でした。

4. 先に亡くなった信仰者たちも滅んでしまっている 18節

四つ目にもたらされる問題が18節に記されていました。18節に「そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。」とありました。キリストの復活がなかったら生じる四つ目の問題は、先に亡くなった信仰者も滅んでしまっているということです。パウロはこの箇所以外でもさまざまところでキリストを信じ、すでに亡くなっていった者たちの姿を「眠っている」と表現していました。例えば15:6でよみがえったキリストを目撃した500人以上の兄弟たちに触れて、「その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。」と述べていました。でもこの18節は、そうやってもう眠ってしまった者たちがすでに滅んでしまったのだとはっきりと言っていたのです。もしキリストの復活が実際にはないのであれば、キリストに信仰を置いて、この世の人生を終えていった者たちもすでにすべて滅んでしまったにすぎないと。

これまで多くの信仰者たちが自分のすべてを主に委ねて、地上での生涯を主のために生きてきました。いろいろな苦しみやいろいろな試練を数多く経験することがあっても、その者たちは先にある希望を覚えて、キリストのためにすべてを捨てて、最後まで従い続けていたのです。かつての信仰の勇者たちも同じでした。ペテロやヨハネといった使徒たちも同じでした。初代教会の時代から今の今に至るまで変わらず宣べ伝えられてきた福音を信じてきた者たちも同じです。そして、今の私たちひとりひとりも同じです。私たちはみんな主と永遠をともにすることを期待して、その日を楽しみにしながら、地上での日々を歩んでいるのです。この地上での人生が終わったとしても、それが終わりではないと信じてきたのです。将来に変わらない希望があると疑わなかったのです。だからこそ、皆さんも同じだと思います。愛する家族のひとりや教会の兄弟姉妹が亡くなったときも、確かに大きな寂しさはあるけれども、必ずまた天で再会することができる。その日を楽しみにしよう、そうやって生きてきたことだと思います。でも復活がなかったとすれば、そのすべての希望は一瞬にして消え失せてしまうということです。今、生きている者たちだけではなくて、もうすでに亡くなった者たちも、同じように罪の中に死んでいるからこそ、亡くなったすべての者たちも永遠に神様から引き離されて、苦しみ続けることになるのです。もしイエス・キリストの復活がなければ、先に亡くなった信仰者たちはすでに滅んでしまったにすぎない。それが四つ目の深刻な問題でした。

5. 私たちの人生は最も哀れなものになる 19節

そして最後五つ目にもたらされる問題が19節で述べられていました。「もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。」とあります。キリストの復活がなかったらもたらされる五つ目の問題は、私たちの人生は最も哀れなものになるということです。キリストがいまだに墓の中にいるのであれば、この世のすべての人の中で私たちは最も惨めで、最も悲惨な存在であるとパウロは結論づけていました。でもまさにそのとおりです。私たちが宣べ伝えている福音には何の力もなく、私たちが持っている信仰にはいっさいの中身もなく、私たちが語り続けている証言は、神様に逆らうものであって、罪の中に私たちは今もなお死んだまま滅びを待つしかなく、すでに亡くなった愛する者たちも滅んでしまったにすぎないのです。いったいこの状態のどこに私たちは喜びや満足を見出すことができるでしょう。それだけではありません。私たちはイエス様こそ自分のすべてだと信じて、すべてを委ねて、今を歩もうとしています。いろいろな困難を味わうことがあったとしても、主が必ず最後には報いてくださるのだと、その日を心待ちにしながら日々を忠実に歩んでいこうとしているのです。

でも、あなたの信仰を置いているそのキリストが、私たちと同じように死の力に敗北して死んだままにいるのだとすれば、いったいどこに希望があるでしょう？また、この手紙を記したパウロは、まさにキリストのためにさまざまな苦しみを味わった人物でした。その信仰のゆえに、人々から憎まれて迫害されて、最後には皇帝ネロの手によって処刑されていったのです。そんな彼がこんなことばを残していました。Ⅱコリント4：8－14に「8 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。9 迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。12 こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。13 「私は信じた。それゆえに語ったと書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っている私たちも、信じているゆえに語るのです。」、そしてここから「14 それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。」と書いていました。これが、パウロが持っていた確信でした。確かにいろいろな苦しみを絶えず味わって、弱さを覚えることもありました。しかしそのような中であってなお、主イエスのよみがえりに心を留めて、今の時の軽い患難は、後に来る重い栄光をもたらすのだと信頼して生きていたのです。主イエスをよみがえらせたお方は、私たちをもイエスとともによみがえらせて、一緒に御前に立たせてくださることを知っているからと、そう希望を抱いたのです。でも、もしキリストが復活していないのであれば、彼が持っていたその希望も、確信も全く中身のないものになりました。彼がすべてを犠牲にしてなしていたその働きも、すべて何の根拠も力もないものになるのです。もしイエス・キリストの復活がなければ、私たちはすべての人の中で最も哀れな者でした。私たちの人生は最も惨めなものになるのです。どこにも希望などありません。もしキリストの復活がなかったのならです。

でもパウロはそこでみことばを終えてはいませんでした。15：20、最後にこう記されていました。「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と。愛する皆さん、それが変わらない真理でした。イエス・キリストは確かに死者の中からよみがえられたお方だったのです。この方は十字架にかかって死んで、墓に葬られて終わりではありませんでした。この方はご自身が約束されていたとおりに、聖書が預言し続けてきたとおりに、確かに3日後に死から復活されました。いのちであり、神の御子であったこのお方を、死は墓の中に閉じ込めておくことなど到底できませんでした。まさに言われていたとおりにです。「54 しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた」としるされている、みことばが実現します。55 「死よ。おまえの勝利はどこに

あるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」と。キリストは死の力に勝利されたお方でした。納められていたその墓は今も空っぽのままです。イエス・キリストはよみがえられました。だからこそ私たちはきょうこうしてともに集って、その偉大なみわざを心から喜ぶことができるのです。そのすばらしさを感謝することができるのです。

そして何よりキリストの復活が実際に起こったものであるからこそ、きょう、私たちが見てきた五つの問題はすべてひっくり返るということです。つまり私たちの福音宣教も、信仰も、実質のないものでは決してありません。キリストは、私たちの罪のために死なれ、墓に葬られ、3日目によみがえり、人々に現れたというこの福音には、どんな人であろうと、信じるすべての人に救いを与える神の力があるということです。だからこそこの福音を語る働きは、決してむだにはならないということです。福音を信じる私たちの信仰も、決して意味のないものではないということです。これこそ最も価値がある揺るがない土台となるのです。私たちの証言も偽りのものでは決してありません。私たちはキリストがよみがえられたというこの歴史的に確かな真理を語り続けている者です。どんなときも正しい、決して一つの誤りもなかった、十分に完全なみことばに、私たちはいつも信頼して生きていくことができるということです。そして私たちの罪も、今はもう完全に赦されているということです。キリストの犠牲は、確かに十分なものでした。何か他のものがささげられる必要はありません。私たちの行いはいっさい要りません。そんなキリストの成し遂げられた完全なみわざ、ただ十字架の死と死の復活にあって、私たちは今、義とされ、罪とさばきから解放された者として喜びを持って歩いていくことができるのです。先に亡くなった者たちも、滅んでしまったのでは決してありません。愛する者たちと再会できる日はいつの日か必ずやって来ます。でもそれ以上に、今も変わらずに生きておられる、この愛する主とお会いする日は一日一日近づいているということです。死んですべてが終わりではありません。必ずやって来るその日を楽しみにしながら、生きていくことができるのです。

そして最後に、私たちの人生は決して衰れなものではないということです。もし宣べ伝える福音に、何の力もなく、持っている信仰にいっさいの中身もなく、語っている証言は神様に逆らうもので、罪の中に今も死んだまま滅びを待つしかなかったのであれば、そんな人生にはどこにも希望などありませんでした。しかし今、キリストはよみがえられました。今も変わらずに生きておられるのです。私たちの罪のために十字架にかかって死んでくださったそのお方は、罪と死の力に完全に勝利されました。私たちにはできないことをこの方は成し遂げられたのです。だからこそ、この方にあつてのみ罪の赦しを持って生きていくことができるのです。今も変わらずに生きておられる、この勝利者がともにいてくださるからこそ、信仰のゆえに、日々いろいろな痛みや試練を味わうことになったとしても、すべてが決してむだにはならないと確信を持って生きていくことができるということです。私たちは、キリストの復活があるからこそ、決して揺るがない希望を今持って生きていくことができます。イエス・キリストの復活は、私たちにとってすべてでした。決して欠かすことのできないものだったのです。

もしまだこの中に、このよみがえられた救い主イエス・キリストを知らない方がいるのであれば、きょう学んできたことをよく考えてみてください。そしてこの方のみ本当の希望があることを知ってください。自分の罪を悔い改めて、この方に救いを求めて出てください。イエス・キリストを信じ受け入れて、自分の罪を悔い改め、今も変わらずに生きておられるこのお方のために生きていってください。この主をもう信じておられるという兄弟姉妹の皆さん、私たちは心から喜ぶことのできる理由を持っています。イエス・キリストは確かに復活されました。このよみがえられた勝利者を心に留めて、感謝を持って日々を歩いていきましょう。